授業関連システムの開発に関する研究

5Ｖ－6

－－ 授業評価システムの開発と妥当性の検討－－

中嶽　治麿
京都文教短期大学

１．はじめに--研究の概要と本報告のねらい--

主題の研究は，「新しい学力観に迫る，豊かで効率の高いきめの細かい授業の展開」を可能にする授業関連システムの開発をねらっている．これらのシステムは，ほぼ全般にわたて構成を終わっているが，まだ十分とはいえないしすべてが新しい学力観を意識したものではない．今回は昨年報告した学習指導案を基盤にして「授業を展開する場合の展開過程での評価・処遇（授業のより円滑で効果的な展開のための修正）と展開後における学習者を対象とした評価・処遇のシステム化，および，これらの妥当性の一部」について報告する．

２．システム化の方針

今回のシステム化の基本的な内容は，概略，

(1) 授業の展開過程における基本的な学習・指導活動のデータベース（ファイル）を，授業の理想モデル（処遇モデル）から構成する．

(2) 各評価質問を新しい学力観に対応する評価の観点から分類・検討する．

(3) 分類された各評価質問に，(1) で構成した学習・指導活動を，評価結果の処遇の観点として検討し，適切なものを順序を付けて付加する．

(4) これを先に構成した学習指導過程案に採用した評価質問にも付加し，授業展開過程にける評価や展開後の評価に活用する．

(5) (1)で構成した学習・指導活動のデータベースの各項目に対して，実際に，どのような処遇が必要かを検討し，処遇方略データベース（ファイル）を構成する．さらに，この内容を（1）の各観点にどう対応させるかを明らかにする．

(6) この処遇方略データベースの項目を，(4) で付加した処遇の観点に追加し，現実的な処遇の内容を示すようにする．

(7) 以上の結果を学習者向けに再編集し，個々の学習者に適した処遇が自動的に出力できるようなシステム化を行う．

のようである．

３．学習・指導活動（評価結果に対応する処遇の観点）データベースの構成

授業の理想モデルの中の処遇モデルの，導入・展開（ゆさぶり）・展開（やまば）・まとめと発展・家庭学習の各段階におけるキーとしての学習・指導活動を集約し，整理して，それぞれの段階における処遇の観点としてまとめた．次は，導入の段階におけるこの観点の一部である．

導入段階での処遇の観点の例

（欠番は省略したもの--以下同じ--）

1. 導入用課題の探求
2. 導入用課題内容の適合性
9. 導入用課題の意識化
10. 導入用課題の意欲化

---------- 以下省略 ----------

４．新しい学力観に対応する評価の観点の設定と評価質問の検討

先ず，新しい学力観に対応する評価の観点として，学習指導要録に提示されている

① 学習意識・意欲・態度　② 思考・判断
③ 表現・技能　④ 知識・理解

の４つの観点を設定して，全ての評価質問をこの観点から分類し，評価質問のねらいを明かにした．この結果，評価質問は，いくつかの観点にわたっていること等が明らかになった．

５．評価質問に関する処遇項目の割り当て

以上のような観点にたって，先に示した学習・

Studies on the Development of System Concerned with Teaching

Osamaro NAKADAKE
Kyoto Bunkyo Junior College
80, Senzoku, Makisimacyo, Ujisi, 611, Japan

指導活動の項目にあたる評価の観点を，各評価質問に割り当てることにした．この場合，一般的な立場から，最も適しているとみられる項目を第1に，次に適しているとみられる項目を第2に，・・・・というように割り当てていくことにした．

評価質問と観点の一例を示すと次のようになる．

ねらい　学習課題の意識化と確認

評価質問　この授業で取り上げる学習課題は何かがよくわかりますか

処遇の観点　2.導入用課題内容の適合性
6.導入用課題の掘り下げ
11.導入用課題への期待感

---------- 以下省略 ----------

6．処遇方略データベースの構成と割り当て

評価の観点のデータベースの各項目に対する処遇の内容をどうするかを検討し，処遇方略データベースを構成した．次はこの一部である．

1 学習のねらいをはっきりときめる
3 学習のねらいを具体化する
4 学習のねらいを掘り下げる
5 学習のねらいをしぼる
9 学習のねらいの意味や必要性を考える
11 学習のねらいで自分に適しているものを選ぶ

---------- 以下省略 ----------

以上のような処遇を，学習・指導データベースの各項目に，適切なものから順に3項目づつ割り当てることにした．

7．処遇の観点を含む学習指導過程案構成のシステム化

以上のような手続きで，各評価質問に対する処遇の概要を決定することができる．次は，これを必要に応じて，学習指導過程案に導入し，授業の展開過程での評価と処遇に，どう対応させるかを検討することになる．実際には，評価質問と同時に処遇の観点を抽出するということにした．

8．授業展開過程での評価と処遇

以上のような手続きによって，学習指導過程案には評価に対応する処遇の観点等が付加されている．さらに，授業の展開過程からこれをみると，

（予定評価者）＋（評価質問）==>反応（処遇）

という図式と，さきの処遇項目を対応させることによって，比較的現実的で妥当な処遇方法を見出すことができると考えられる．

9．授業展開後における学習者に対する評価と処遇のシステム化

先に学習指導過程案で採用した評価質問を編集して，学習者用授業アンケートを構成する．次に，これを授業終了後に学習者に実施して，授業に関する反応をとる．この結果，消極的・受容的な反応や否定的な反応を示した学習者には，処遇データベースの中の必要な項目を自動的に出力するようなシステム化を行う．

10．事前・事後調査からみた妥当性の検討

終わりに，学習準備の状態からみた学習の可能性と事前－事後調査の差でみられる変容の状態との関連を示すと，次の表のようになる．

表　可能性と事前－事後調査の差の関連(%)

		可能性			
		0	1	2	計
事前	−3	0.2			0.2
	−2				
	−1	9.0	4.4		7.9
差	0	78.5	32.4	32.6	70.1
事後	1	9.7	58.8	67.4	19.2
	2	2.0	4.4		2.1
	3	0.6			0.5
	計	100.0	100.0	100.0	100.0
平均		0.06	0.63	0.67	0.17
標準偏差		0.58	0.64	0.47	0.62

これから，可能性が0（学習準備未完了）では差が0の者がほとんどで変容していないが，可能性が1，2（学習準備完了）は，差が1以上の者が多くなっていることがわかる．

11．おわりに--課題と対応--

ここでの処遇は，概念的なところもあり，効果的な展開には，さらに，考察を要する点を残している．具体的で現実的な処遇は，以上のような内容を基礎にして進めることになる．

この研究に関しては科学研究費補助金（試験研究 N006558024）の補助を受けている．